

2018年10月16日

学力向上推進委員会 委員長様
委 員様

全国学力・学習状況調査と学力問題に関する意見書

愛知県教職員労働組合協議会
議長 岩澤 弘之

全国学力・学習状況調査（以下、「全国学力テスト」とします）に関わって、貴委員会では、愛知県の教育についての論議を進めておられることと思います。

毎年、私たちの組合では、4月の調査実施以降、当日の子どもや担任の声を聞き取ったり、テスト問題を分析したりしてきました。また、来年度実施予定の英語調査についてもアンケート結果などを通して分析をしてきました。その結果、改めて全国学力テストが子どもたちを苦しめ、競争をあおり、学校教育をゆがめるものであることが明らかとなりました。私たちの組合では、全国学力テストの中止を求めて取り組みを進めているところです。

この意見書では、主に今年度の小学校問題を検討することを通して、学校教育にとって何が必要なかをまとめてみました。中身は、現場の子どもたちや教職員の願いを反映したものです。ぜひ、内容をよく吟味していただき、貴委員会での論議に生かしていただきたいと願っております。

I 学力把握はできるのか？・・・A問題から考える

実施要領では、「調査により測定できるのは学力の特定の一部分である」とされていますが、本当に学力の把握はできるのでしょうか。

A問題の調査時間は、国語A・算数Aともそれぞれ20分間に過ぎません。問題数も限られています。

ア 国語Aについて

国語Aは、たったの12問で、そのうちの半分が漢字と慣用句の問題で占めています。

問題形式は、12問中11問が選択式で解答するものとなっています。選択式では、どれかに○をつけておきさえすれば、まぐれで「正答」となることがあります。結果を見ただけでは、正しく理解しての正答なのか、理解できなかったのにまぐれで「正答」となったのか見分けがつかえません。選択式では、学力把握ができないのです。

イ 算数Aについて

算数Aもたったの14問です。計算は、少数の除法のみです。整数の四則計算、その中でも毎年結果がおもしろくない繰り上がりのある足し算、あるいは繰り下がりのある引き算の計算問題が、1問もありません。

14問中10問が、選択式の問題となっています。

このように、A問題では、「知識・技能」の学力把握がきわめて不十分なものとどまっています。とりわけ、「知識・技能」の習得が十分できているかどうかという実態が把握できないものとなっています。

II 学力把握はできるのか？・・・国語B問題から考える

国語Bは、たったの8問で、そのうちの5問が選択式となっています。難しい問題となればなるほど、正答率は低くなります。その一方、選択式によって、当てずっぽうで「正解」と判断される割合が高まります。「活用力」の把握については、選択式の問題はふさわしくありません。

残りの3問はすべて、条件に合わせて書く記述式の問題となっています。いずれも正答率が低くなっていますが、以下のような原因があると考えられます。

- ア 問題文と設問が長文となっていて、読み解くことが難しくなっている。
- イ 問題文と、それとは別のメモや「伝記など」とを照らし合わせて読み解くことが求められる。
- ウ 設問を理解してから、ページをさかのぼって、該当箇所を探すことが求められる。
- エ 字数などの条件に合わせて書くことが求められる。
- オ その際、子ども本人が考えたことを書くわけではない。設問にある架空の小学 6 年生の考えをまとめることが求められる。
- キ これらのことを、短時間で行うことが求められる。

このように、記述式の設問は、多数の情報を短時間に処理する高度の情報処理能力を把握しようとする問題です。実施要領の言うところの「知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力」、つまり「活用力」を把握するための問題から大きく外れていると考えられます。

これらのことから、国語 B 問題では、まともに「活用力」を把握することはできないと考えられます。

III 「愛知県の小学校は、全国平均より低い」?

今年度の調査結果では、「愛知県の結果は、すべての教科で全国の平均正答率を下回った」という報道がなされています。この点について、どう考えたらよいでしょうか。

まず、全国学力テストは、「学力の特定の一部分」（実施要領）を測定したものにすぎないということです。国語・算数・理科の学力の一部分を測定にしたものにすぎないのであり、これで学校での教育活動全体を判断されてはかまいません。全国学力テストで把握できない学力の部分の方が圧倒的に多いのです。

次に、I と II で明らかにしたように、全国学力テストでは「学力の特定の一部分」どころか、学力をまともに把握することはできていないのです。学力が把握できていないにもかかわらず、その結果の点数が比較されること自体が間違いなのです。

いたずらに、その結果数値だけを全国と比較すると、どういうことになるのでしょうか。全国平均と同程度となるように、あるいはそれを上回るようにという圧力が各学校にかけられることとなります。全国では、テストの事前対策が広がっています。中には、6 年生の 4 月、新年度が始まっても、新しい教科書を使わず、過去問題練習に明け暮れてしまうという事態も起きています。点数を上げるということが目的とされると、事前対策が広がり、普段の授業がおろそかにされてしまうのです。

義務教育は、すべての子どもに確かな学力を身につけさせることを目的として行われています。全国学力テストの事前対策を推し進め、学校教育をゆがませることは、義務教育にはあってはならないことだと考えられます。

IV 「楽しい授業」「分かる授業」を

「授業改善を進めることが大切である」と言われることがあります。全国学力テストの結果をもとにした「授業改善」とは、「活用」を重視した授業であり、「上位層を伸ばす」授業となります。結局は、一部の子どものみが活躍する授業となり、授業が分からない子どもを増やすだけの結果となります。

子どもたちはだれもが、「勉強が分かるようになりたい」と思っています。それに対して、「児童生徒が『教科の勉強は大切』『授業の内容はよく分かる』と回答しているが、それに比べ『勉強は好き』と回答する児童生徒は少ない状況が依然として続いている。・・・児童生徒の『分かるようになりたい』『できるようになりたい』という思いに応えるため、・・・楽しい授業、分かる授業、できる授業づくりを目指したい。」（平成 25 年度全国学力・学習状況調査 学力・学習状況充実プラン、愛知県教育委員会義務教育課 平成 26 年 2 月）という提案が、今こそ求められているのではないのでしょうか。

教員の多忙化解消を図り、すべての学年で少人数学級を実現して、「楽しい授業」「分かる授業」を実施できるようにするのが、教育行政の役割だと考えますが、いかがでしょうか。

以上